



 自著紹介

 『山陰研究ブックレット6
 三江線の過去・現在・未来：
 地域の持続可能性とローカル線の役割』

(島根大学法文学部山陰研究センター、2017年3月)

関 耕 平

 (島根大学法文学部法経学科准教授)

JR三江線は島根県江津から広島県三次までをつなぐ108キロ余りのローカル鉄道である。車窓からのどかな田園の情景、江の川に沿って走る風光明媚な風景など、大変魅力的な路線であるが、残念ながら2018年3月末での廃線が決まっている。

2015年10月の出勤直後の早朝、大学事務室で「三江線廃止へ」という山陰中央新報一面の見出しが目飛び込んできた。そのときの衝撃がいまだに忘れられない。収支が全くあわなくて年間9億円の赤字。誰も乗らない。確かに分が悪い。しかしこのまま三江線廃線という既成事実が積み重なってしまうことが、地域再生にむけて模索を続ける沿線地方にとって負の意味で象徴的な出来事になってしまうのではないかと、経済性や採算性だけではなく、多様で多面的な価値でもって評価するという社会の方向性がより狭められてしまう

のではないかと、そんな危機感が頭をもたげた。

その後、この問題に関する住民説明会に参加するなかで、多くの沿線住民の声—受け止める人によっては郷愁や感情論として片づけられるかもしれない意見—を聞きながら、こうした思いをいったん受け止め、この背後にある事実をできるだけ説得的に示しながら、今後の廃線をめぐる論議を深められればと考え、専門外でありながら蛮勇を奮って本書の刊行準備を始めた。

本書は三江線廃線で失ってしまうものに思いをはせながら、本学の教員を中心に8名によって執筆された。タイトル通り、過去、現在、未来の3部で構成されている。

「第一部 三江線の過去」では、三江線が体現している江の川流域・沿線地域のつながりと歴史的重みが、縄文・弥生の時代にまでさかの

ぼりながら示される。さらに三江線沿線地域および敷設の歴史的経緯が明らかにされている。

「第二部 三江線の現在」では、廃線までの経緯を振り返り、廃線やむなしとしたJR西日本が示す論理を検討している。また、関係各主体の廃線問題への対応を検証するとともに、同様に廃線の危機に直面した名松線（三重県）の復旧過程から、県が果たす役割の重要性を示している。さらにそれぞれの現場で廃線問題に向き合い三江線の利活用に取り組んでこられた沿線の観光協会の方々にその思いを執筆いただいた。

「第三部 三江線の未来」では、広島県にある可部線を事例に、すでに廃線となった沿線地域の実態を明らかにし、教訓を示している。また、三江線廃線後の地域公共交通（バス代替）のあり方について重要なポイントや関係主体による関与のあり方を検討している。また、今後のローカル線の維持に向けた根拠としての「交通権」の考え方を示し、これを支える財政的な仕組みも描いている。

2017年12月現在、廃線の前に一度は乗っておこうと全国から三江線に

乗客が押し寄せている。記念の入場券・乗車券が発売されるなどの廃線直前の活況は「葬式商売」と揶揄される。本書がこの「葬式商売」に該当するようなことはあってはならないと筆者は考えている。廃線後も沿線地域の魅力は薄れることはないし、地域を維持していくことの重要性は変わらない。廃線後の地域のこれからを展望しながら、沿線住民による多くの取り組みがはじまっている。本学の教員・学生にはぜひ、こうした動きを応援、後押ししてほしい。

三江線の廃線問題は、沿線地域の固有の問題である。しかしそれは同時に、効率性や独立採算だけでは回らない地域・地方に、日本全体がどう向き合っていくのか、という普遍性を持った問題でもある。本書が、こうした問いに多くの方々に向き合うきっかけになれば幸いである。

